

いろんな可能性を模索することを諦めないでほしい

語り手 堀庭（清水）くるり（高校十一期生 テレビ業界）

聞き手 北村 日和

*

立守との出会い

―本日はお忙しい中お時間いただき、本当にありがとうございます。

改めまして私は、立命館守山高校でリツモリの二十年史というものに参加しておりまして、取材やインタビューというよりも、対話の中で自然にお話を伺えたらいいなと思っております。

はい、お願いします。

―最初なんですが最近、由谷先生からご結婚されたというお話いただきました。

そうそう（笑）。結婚しました。

―こんなお忙しいし、幸せな機会にお話しを伺えること本当に嬉しいなと思います。

全然全然。ありがとうございます。

―では早速質問に入らせていただきたいと思います。まず、立命館守山の卒業生であるということで、立守に進学を決めた理由を聞かせていただきたいです。

きっかけはオープンキャンパスでした。そこに当時の生徒会長さんがいて、その人は今までに会ったことのない人種というか（笑）、すごいハキハキとプレゼンテーションされている姿を見て、私も両親もこういう人になれたらいいな、という思いを持ったので立守に決めました。

―そうだったんですね。高校から入られたっていうことなんですけど

中入生いるじゃないですか。一緒に過ごすなかで感じた違いとか、印象に残っていることとか何かありますか？

どうだろう。北村さんはどっちなんですか？

かかれていたと思うんですけど、それはどう受け止められていたんですか。

—そうやね。高一の時とかは、自分でそれをどう乗り越えていくっていうか、どうやったら自分もそうなるかなっていうのがイメージできてなかったから、最初は確かにしんどいというか、先輩たちみたいに本当になれるのかなみたいなのがあったんだけど、自分の中で切り替わったのが、高一の時に英語の授業、確かコミュ英やったかな。そこでプレゼン大会があつて。その時に基本、帰国子女枠みたいな方がガンガン行く中で、たまたま選ばれて（笑）。メディアホールでみんなの前でプレゼンして。もう優勝もなんもできひんやろなと思ってたときに、二位になれたんかな。全然すごいじゃないよ。粘り強かったってだけやったんだけど。めっちゃ用意をしたから。その用意をしてというか、頑張れば何かしら掴めるものもあるし、どうしたらいいんやろうじゃなくて、どうにかしようって考えた方がいいなって、その時すごく思えた。そこから人生が大きく変わったかもしれないです。

—うわー。すごいですね。尊敬します。

—本当に英語は全然喋れなかったけど準備さえすれば喋れるようになるとは思って。そこから留学も行き始めたりしたかな。だから、この経験が本当にきっかけで。

—すごくいい経験ですね。当時、どんな高校生だったんですか。

—結構、挙動不審やったんじゃないかな。

—えー。意外です（笑）。

—挙動不審というか、すぐ体が先に動くタイプではありました。あとは、結構うるさいとも怒られたし。

—いろんな人から言われてたんですか？

—そうやな。でも、そこまでうるさかった自覚もないねんけどな、とか

*

マネージャーとして学んだ「支える力」

―学生時代に部活でバレーボール部のマネージャーされてたってお伺いしたんですけど、選んだきっかけをお聞きたいです。

ほんまにしょうもないんやけど、母がずっとバレーボールをやってたから、その影響で好きで。ただ自分はそんな運動得意なタイプじゃなかったからマネージャーでっていうのと、あとは中学の時も生徒会とかをやってて、誰かのために何かをするみたいなのがすごい好きというか、自分のキャラ的には合ってるなと思って、マネージャーっていうポジションを志望したって感じ。

―なるほど。苦労したこととかっていうのは何かありますか？

やっぱり自分がバレーができない、経験が無い中で部員に頑張れって言ってもバレーのこと何もわからんくせについて思われてないかなみたいな葛藤はすごいあつて。ただ、わからんからこそ、変に踏み込みすぎず、最大限にやろう、自分の見えてる範囲でできることをやろうって割り切って、自信を持って自分の役割を全うすることができたかな。細々したところやけど、もう本当にタオルを畳んであげるとか、水を補給してあげるとか、そういったことをやってあげるだけでも結構喜んでもらえたりとかして。だから、わからないことに取り組む時に、背伸びをしないみたいなのところはそこで学んだかな。

―部活動を通して試合や練習の中で、印象的だったことはありますか。

例えば、試合最中にマネージャーって、基本は記録をつけたりとかが仕事にはなるんだけど、つけてるだけじゃなくて、声も出せるやんって

思ってた。そこから、もうめっちゃくちやでかい声で応援したりとか、結構いっちゃ噛みしてくるマネージャーではあったと思う。

見て、私は高一から公務員になるって決めてたから、それをなんとか成し遂げなあかんみたいな、結構、義務的な感じに自分で自分の幅を狭めてたことに気づいて。だからその人たちを見て、自分もこう楽しく語れるような夢をもう一回探そうって思えるようになったかな。だから自分の夢が変わったのがもうその瞬間。やから、めっちゃくちゃ大きい経験だった。

—すごい。次に大学の話をさせていただきたいのですが、なぜ経済学部に進学されたんですか。

もうざっくり言うと、留学に絶対行きたくって。四年間のうちに一年間留学に行きたいっていう気持ちがあって、その中で経済学部にそういうプログラムがあったのよ。休学せずに一年間留学に行けますみたいな。そこに行きたかったから入ったっていうのが理由なんだけど、コロナで留学に行けなくなり。

—うわー、悲しい。四年間もう全く行けなかったですか。

うん。もう卒業旅行でちよつと行けたぐらいで、海外にはほぼ行けなくって。留学に行くはずだった一年間が空白になるのは、悔しすぎると思うって。それで、立命の全部のキャンパスにある、国際寮っていうところに入居することを急遽決めてん。入居者の九十パーセントが留学生で、十パーセントだけいる日本人がお世話をしないといけない。例えば、市役所に転入手続きっていつて、ここに住み始めますみたいな申請を出さないといけないんだけど、それって英語の説明文とかがあまり滋賀にはなくって、手続きのフォローをしてあげたりしてた。その寮にはちよつど一年間住めるっていう区切りやった。言語が全部英語やったから、一年間ほぼ留学したみたいな状態にできて、なんとかやりたかったことができたみたいな感じやった。

—立命ってAPUあるじゃないですか。そこと似ている感じですかね。めっちゃ似てると思う。環境として。

—初めて知りました(笑)。すごいいいですね。その寮は今

そう、みんなシフト組んでちゃんとやって、在庫仕入れてやって、すごい楽しかった。そのカフェが学校の敷地内にあるのは、立命はBKCだけだから。よかったなって感じ。

—大学を経てメディア業界に進もうと思われたきっかけというのはなんですか？

それかというと、やっぱり漠然と滋賀に貢献したいっていう思いはあって、それでどういう方法があるかなっていうのを高三の留学行った時に考えるようになって。そこから、関西のテレビ局やったら、滋賀はむしろ関西中の人の役に立てるかもしれないと思った。関西の人たちに対して、毎日バラエティ番組やドラマ、楽しい感情を与えられたりとか、ニュースを通じて情報発信っていう形でも貢献できるなと思って。実際会社でも、私がかい声で、滋賀出身です。滋賀に関わる仕事全部やりたい。ぐらいい言ってるおかげもあって、この前とか、万博で滋賀魅力体験ウィークっていうのを実はやってただけ。

—昨日、万博行きました（笑）。

ほんまにいいよな。万博楽しいよな。こんな感じで、鳥人間コンテストっていうのをうちの局がやってるから、鳥人間のTシャツを着て、番組と滋賀の魅力を発信する活動をしてきてん。（写真を見ながら）

—飛び出し坊やもいますね。ははは。

そうそう（笑）。滋賀出身ならではの目線を活かして、「滋賀って面白そう」と思ってもらえるような広報ができていたらいいな。

—なるほど。今後のキャリアで挑戦してみたいこととかってなにかありますか。

ああ、でも、これはもうずっと言ってる。その、滋賀に何かしらの形で貢献したいっていうところがあって、滋賀の人から滋賀の魅力

を発信してくれてありがととか、そういう風に思ってもら

る今は、表に立つ人たちが、プレッシャーとか感じてたら、いやいや大丈夫大丈夫とか意識的に言える存在にはなってるなとは思うし。意外と嫌やって思った経験があるからこそ、同じようなシチュエーションになつてる人に共感できたりとか。絶対何かしら、将来に繋がるからついうのは思ってる。

—そうですね。もう、最後になつてしまふのですが。これから人生を過ごしていく上でのアドバイスとかなんかあったら。

そうやね。いろんな可能性をいっぱい探して、いろんな人にいっぱい会つてほしいと思う。私は高一の時に夢を絞りすぎて自分でこう、しんどくなつてたから。そうではなくて、いろんな可能性を模索することを諦めないでほしい。そしたら絶対幸せになれると思うから、諦めず可能性を模索することを頑張つてほしいと思います。

—ありがとうございます。頑張ります。改めて、本日はありがとうございます。ありがとうございました。

ありがとうございます。

—結婚という新しい人生のステージに入られたばかりで、本当にこんな機会にお話ただけことが本当に嬉しく思います。ありがとうございます。貴重なお話を聞くことができてよかったです。

もうとんでもない。こちらこそありがとうございました。

【感想】

今回の対話からは、自分の可能性を自分で切り開き、挑戦を通して成長していく姿がとて伝わってきました。高校時代の挑戦や留学での経験を通して、夢や目標は自分の行動次第で形にできることを実感し、迷

いや不安も成長の糧になると感じられた点が特に印象的でした。また、その経験で得た学びや姿勢が、現在のキャリアや日々の行動にもつながっていることが伝わってきました。迷わず挑戦し、自分の可能性を広げる大切さを教えてくれる、非常に示唆に富んだお話でした。

